**政治思想基礎　第十二講　現代思想の源流 (4) ウェーバー ＆ (5) シュミット**

　　　　　　　　　　　　　　　　　近代政治理論の光と影　　　　　　　　法学部　萩原　能久

http://www.law.keio.ac.jp/~hagiwara/　　　　　　　　　　　　　　　　　　hagiwara@law.keio.ac.jp

Max Weber 1864-1920

Carl Schmitt 1888-1985

Ⅰ　**彼らの時代**：帝政ドイツ(1871-1918)とワイマール共和国(1919-1933)

　議会主義の無力：その帝政ドイツ的意味：宰相ビスマルク →血とか、言論がなかった

→ドイツの憲法に予算案が不成立

→「統治責任論」発動

→議員内閣制ではなく首相は皇帝の任命

→制限選挙

→議会、反政府的な活動

→ビスマルクと妥協

→分裂、行政府をチェックする

→予算案の決をねる

→ビスマルクの時代

→議会主義の無力

→サルトーリ→典型的な状況

→政党の風があった

→イデオロギー的対立があった

→党が公約を出して来るが、反発

　　　　　　　　　●そのワイマール的意味：多党乱立　→　強大な権限

→緊急事態において、初兵

→憲法を制限する

→大統領の強大な権限

**Ⅱ 引き裂かれた政治理論家　　マックス・ウェーバー**

・比較宗教社会学：西欧近代に固有な「合理性」（世俗内禁欲と生活エートス）

→開拓を行なっていた

→西洋において合理化が進んだか

→合理化→宗教的バックグラウンド

→インド　→　現生否定的

→　隠遁的瞑想生活

→　達人信仰

→中国　→現世肯定的

→科挙制度に顕著な管理的合理性

→伝統への埋没、正当化

→現世を超越したもの

→宗教的救済原理(緊張 )の欠如

→神による宗教的救済

→伝統的宗教化

→現生に積極的

→　神という超越的なもの

→　日常性の打破

→　精神的対立

→マックスウェーバー→暗い展望

→合理的な思考様式→魔術的な思考様式からの脱却

→緊張関係をなくす

→自由の創出

→合理主義による、

→脱魔術化、再魔術化

→転轍手

→マルクスに同意　→理念でなくて利害である

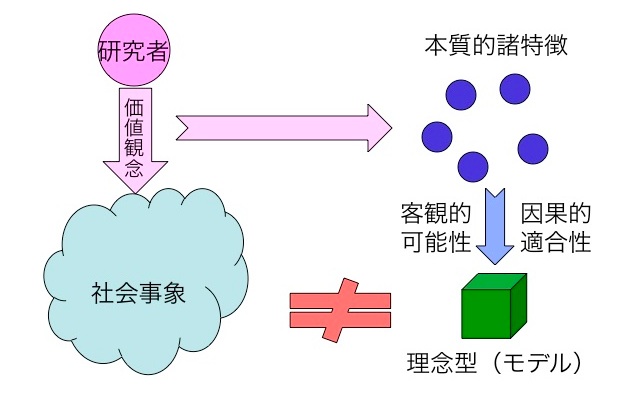
→路線の切り替え役

→利害が根本的には動機

→軌道を決定する

→マルクスと同じように利害他ならない

・経済と社会における支配の社会学



ウェーバー解釈の難点

「合理性」への信念（世界の脱魔術化、官僚制）と

非合理性（指導者民主主義Führerdemokratie）への飛躍

→カリスマへの願望

　　（W.モムゼン：「形式的合理性のカリスマによる補完」）

　　→　社会科学者ウェーバーとナショナリストとしてのウェーバー

→価値　→それぞれの人間がどの価値を選択するのか

→価値の多弁主義、多神教

→実像的な関心

→マックスウェーバーを支えるもの

→かなり強く意識

→合理性が人間の進歩

→意識

ウエーバーの社会科学方法論的考察

　　「理念型Idealtypus」と「価値自由Wertfreiheit」

　　　　参照：正統性根拠の三類型としての合法的支配／伝統的支配／カリスマ的支配

→正当性根拠

→合法的支配

→支配の正当性

→なぜ正しいとして受けられる

→理念型に他ならない

理論は学者がもった作ったもの

→研究者にとっての理想形

→ユートピア的理念型

→現実の支配→3つの混合体

→現実を支配するための道具

→理念型

政治に固有の手段：物理的強制力

国家：「国家とはある特定の地域内部で、正当な物理的強制力の独占を要求する（そしてそれが成功した）人間共同体である。」

→社会科学　→　主張　→　危惧している　→　事実を分析しているようなもの

→そういう自体

→社会科学者　→　特定の価値

→　識別するように

→自分のイデオロギーが混入するように

→価値自由

→　理念型と価値自由

政治：「国家間であろうが一国家内において、国家の包容する人間集団相互の間であろうが、権力の分け前にあずかろうとする努力であり、あるいは権力の分配を左右しようとする努力である。」

権力：「ある社会関係の中で、抵抗を排除してまで自己の意志を貫徹させる可能性」

権力　→　自分の価値観を相手の押し付けるという事

**戦争モデルとして戦争を紹介していた**

**Ⅲ カール・シュミットの魔性の政治学**

ヤヌス(双面神)としてのシュミット: 天才か、二〇世紀全体主義のイデオローグか

→二面性　→　思想家　→　天才的な思想に満ちているか、ナチの思想も含んでいる思想家

シュミットの反自由主義

\*公開制と討議に基礎をおく議会制（＝自由主義）の否定と、直接的な民主主義の表現としての歓呼賛同 (Akklamation)

→広場に人民を集めて政策について、異議なしというのが民主制

シュミットの本質　→　ルソーと同じ

→治者、主人であると同時に政治の客体である

→治者としての同一性

→政策 ~ 方式

→

\*技術という巨大な手段を使いこなせない自由主義的中性国家と「全生活領域を政治化する」全体国家

『政治的ロマン主義』

近代的主体‥‥自由主義とロマン主義の同根性（人間性の善）

→政治的ロマン主義が終わる

→真の純然たる政治

ロマン主義の本質＝主観化された機械原因論（Occasionalismus）(21頁)

政治の美学化批判：「政治的活動がはじまるところで、政治的ロマン主義は終わる」。(193頁)

　　→ それでは「真の」、「純然たる」政治的なものとは何か？

『政治神学』

「近代国家(ローマ協会の神学的モデル)の重要概念はすべて世俗化された神学概念である。」(49頁)

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 政治 | 友 | 敵 |
| 道徳 | 善 | 悪 |
| 美学 | 美 | 醜 |
| 経済 | 利 | 害 |

　　 → 神学における「奇跡」の役割を担う「例外状況」の政治学

→「奇跡」→例外状況

→例外状態

→戦争においてこそ

→曖昧なまま人が消されてしまう

→例外状況の政治学

戦争という「例外状況」に政治の本質が露呈する。

『政治的なものの概念』

「真の政治理論とは、すべて、人間を『悪なるもの』と前提する。すなわち、問題をはらまぬものとしてでは決してなく、《危険な》かつ動的な存在としてみなすものである。」(74頁)‥‥‥「《万人の万人にたいする闘争》こそ‥‥‥政治的な思想体系の基本前提である。」(80-1頁)しかるに自由主義は闘争を経済面での競争に、精神面での討議に、国家を社会に移し変え、人類というイデオロギーのもとに闘争に目を向けない。(91頁)

→人類というイデオロギーを元に目を向けることに戦争を起こす方が状態

→真の政治理論

→経済的な競争

→国家という権力体

→自由な政治という社会

→甘いイデオロギー

→政治的なものに固有の指標

→国家、政治に先立って存在しなけらばならない

→シュミットは主張している

→政治に固有の区別

→道徳の美学と利害の二項対立

→政治の自立性　→　シュミットは主張する

→　人間集団　→

政治的なものの指標：　友と敵の区別　（政治的なものの事実性、独立性、自律性）

政治の本質にある戦争

「戦争というものは、敬虔なもの（宗教的なもの）でも、道徳的価値のあるものでも、採算のとれるものである必要もない。」(31頁)こうしたことの証左は、国家にのみ「交戦権」という途方もない権能が与えられていることに現れている。(48頁)

友と敵の区別のできない「いくじのない国民」は「この地上から消え去るのみ」である。(61頁)

**→友と敵の区別ができないのが国家→消え去るのみ**

**→道徳的　→正当化が必要、→　やるかやられるか**

**→享受できるかどうか**

**→相手を滅ぼすか、屈服させるように努める**

**→まさに人間から出発する**

**→政治理論が帰結してく**

**Ⅳ ウェーバーとシュミット**

政治への視点 →　政治的なものの概念　→　政治を目的から定義することはできない

→固有の手段

→相手の抵抗を排除する、コンフリクト状況

→無理やり相手に言うことを聞かせる

→政治を国家とかに先立って定義づける

Ｗ：手段としての権力に注目したコンフリクト

Ｓ：権力の前提となる根源的決断（友敵の区別）に注目したコンフリクト

状況認識

Ｗ：ブルジョア、プロレタリアートともに無能・未成熟。あらゆるものを包摂する「人間機械」としての国家・官僚制

Ｓ：議会主義＝自由主義の無能。他方で技術という巨大な手段の成立

処方箋

Ｗ：官僚機械を持つ「指導者民主主義」

Ｓ：人民の認可を受けた大統領独裁と歓呼賛同という直接的な民主主義の表現

政治・決断主体

Ｗ：自律した個人

Ｓ：全体国家の主権者（個々の民衆は能力も権能もない。戦場で個々の兵士が「敵」を判断するのではない。）

**政治主導者**

**→時代状況の処方箋**

**→官僚制というマシーン**

**→指導者民主主義**

**→現状を打破する見込み**

**→議会主義の無力さを見ている**

**→議会制民主主義**

**→直接的な民主主義**

**→政治主義**

**全体国家の主権**

**→兵士が下した決断**

**→主張　→　ウェバー**

**Ⅴ ウェーバーのジレンマ：　責任倫理と心情倫理**  
政治家の「資質」

1. 情熱‥‥「ザッヘ」への情熱的献身　　　　　←→「知的道化師のロマンティシズム」

→自分がやらなくてはならない仕事に没頭する

→ポピュリズム

→軽蔑する

→情熱的に責任感を持つ

1. 責任感
2. 判断力
3. →何が正しいという判断力

責任倫理と心情倫理

・心情倫理：悪に対して力をもって抵抗しない。右の頬に左の頬。

・責任倫理：汝は悪に対して抵抗しなければならない。そうでなければ汝は悪の蔓延に対して責任を負う。

→自分の行為に対して結果を負わなければいけないという者

→政治に固有の倫理としてもの

→責任倫理

不明瞭なウェーバー：「心情倫理」と「責任倫理」の区別？　その一致可能性？　結果責任はどこまで及ぶ？

→全て負うのは難しい？

→過失　→　ほぼ政治家にとっては重い要求

→マックスウェーバーの言っていることはどこまでの広がりがあるのか

→一つは合理主義が進歩と繁栄をもたらす

→全体主義、シュミットの抱え込んでしまったもの

<試験>

マークシート、語群(理論家、人の名前)

引用当てクイズ、文の誰の言葉？

著者名当てクイズ、誰が書いた本なの

理論当てクイズ、人の名前

理論家の説明文から、理論家の名前を当てにいく

40点分

→問いに対する答えに対して答える

→抽象的ででかい問題

→問いに対する答えになっているかどうかを意識しなければならない

→違うことを答える答案

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*参考文献\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

マックス・ウェーバー『社会科学と社会政策にかかわる認識の＜客観性＞』、岩波文庫

　　　　　　　　　　『職業としての学問』、岩波文庫

　　　　　　　　　　『社会学の根本概念』、岩波文庫

　　　　　　　　　　『職業としての政治』、岩波文庫

　　　　　　　　　　『権力と支配』講談社学術文庫

カール・シュミット『政治的ロマン主義』(1919)、みすず書房

　　　　　　　　　『政治神学』(1922)、未來社

　　　　　　　　　『現代議会主義の精神史的地位』(1923)、みすず書房

　　　　　　　　　「中世化と非政治化の時代」(1929)（『合法性と正当性』、未來社所収）

　　　　　　　　　『政治的なものの概念』(1927,1932)、未來社

ヴォルフガングJ.モムゼン『マックス・ヴェーバーとドイツ政治1890-1920』、未來社

仲正昌樹『カール・シュミット入門講義』、作品社

長尾龍一『リヴァイアサン─近代国家の思想と歴史』、講談社学術文庫